



NPO法人 西東京臨床糖尿病研究会

MANO a MANO

特別号～「近藤 甲斐夫先生を偲ぶ」～

平成24年1月23日に享年77歳にて永眠されました近藤 甲斐夫先生を偲び、哀悼の意を表するものとして、ここに特別号を発行いたします。

謹んで近藤甲斐夫先生のご霊前にお別れの言葉を申し上げます。

1月23日午前9時前、ちょうど私が専門外来を開始する直前に近藤医院の堀口婦長さんから電話をいただきました。常日頃から近藤甲斐夫先生は連絡事項があるときには堀口婦長さんを通じて行うことが恒例でしたので、何気なく電話口に出るとそれは近藤甲斐夫先生の訃報でした。とるものも取り敢えず駆けつけたい思いが先行いたしました。私の日常診療の場は近藤先生が開設した公立昭和病院の内分泌・代謝内科であります。患者さんの診療を最優先することの大切さを指導してくださったおひとりが近藤先生であります。そのことを思い浮かべ、外来・病棟業務を通常通り全うすることを優先させていただきました。何とか近藤医院を訪れることができたのが午後8時ごろでした。まだ医院に詰めておられた堀口婦長さんと連れ立って雪が深々と降る中をご自宅までお伺いし、やっと、近藤先生にお会いすることができました。いまだにお亡くなりになったことが信じられない思いでしたが、近藤先生の安らかなお顔を拝見し、これまで先生よりいただいた数々のご厚情が次々に脳裏に浮かびました。

近藤先生の糖尿病診療をはじめとする地域医療への貢献は論を待ちませんが、それよりも私にとって大きかったものは疾病管理の考え方です。先生は糖尿病の日常診療を充実させるのみならず、常に地域全体のレベルアップとチーム医療の大切さを第一に考えられていました。西東京臨床糖尿病研究会もその流れの中で設立に至ったと理解しております。

私が近藤先生が開設された公立昭和病院内分泌代謝科（現内分泌・代謝内科）の責任者として赴任したのは平成元年10月でした。近藤先生が昭和病院を退職されご自分のクリニックを開設されてから8年が経過していましたが、近藤先生の薫陶を受けた糖尿病チーム医療のスタッフが非常に充実した体制を構築している中で最初から糖尿病診療に取り組めるという幸運に恵まれました。院内の糖尿病診療体制の構築一から始める苦勞をしないで済むと同時に外に向かった活動始める基盤が最初から存在していたのです。

近藤先生は西東京臨床糖尿病研究会の名称を考えられたとき既存の東京臨床糖尿病医会や全国臨床糖尿病医会に習わず、あえて医の文字を使用しなかったと伺っています。それは医師のみならず、コメディカルスタッフと手を携えてともに学びともに働くという理念が根底にあったからです。

糖尿病の本格的教育ビデオを作成するときも温かく相談にのっていただき、制作の過程でも色々ご教示をいただきました。現在の中核的事業である西東京糖尿病療養指導士制度立ち上げの際も、種々の賛成・反対のご意見があり実現が危ぶまれる事態もありましたが、常に背中を押していただきました。そして、なによりも現在のような西東京臨床糖尿病研究会の事業展開を可能としたNPO法人化についていち早く理解を示し、積極的に支援をしていただいたことが、この地域の糖尿病医療連携と管理栄養士紹介派遣事業等の医療支援事業がここまで発展しえた大きい要因でした。現在の西東京地域の糖尿病診療体制に対する全国的な高い評価も近藤先生の大きい貢献があって初めて可能となったと思います。

また、11月14日の世界糖尿病dayにスカイタワー西東京をブルーライトアップすることが実現したのも近藤先生のお力です。昨年は東日本大震災のため実施が危惧されましたが、光源のLED化を実現していただき無事開催することができました。これまで毎回近藤先生に点灯のカウントダウンをやっていただきましたが、ゼロカウントから水銀灯が徐々に明かりを増していくのを待っているのが実状でした。昨年是一日前倒して日曜日の11月13日に点灯式を挙行いたしました。近藤先生のカウントダウンとほぼ同時にスカイタワー西東京が見事に、これまで以上に、明るくライトアップされたのは、見応えがあり印象深いものでした。

これからも私たちは先生のご遺志を受け継いで、力を合わせて活動をさらに発展させてまいります。また、情報発信力を高め糖尿病診療と医療連携の均等化を進めてまいります。

近藤先生、どうぞ安らかに眠りください。

当研究会理事長

公立昭和病院 貴田岡 正史



近藤 甲斐夫先生

近藤先生のご子息より

『父、近藤甲斐夫を偲んで』

北海道大学病院 第二内科 近藤 琢磨

まず初めに、故人のためにこのような特別号をご企画下さり、親族を代表して感謝の意を表します。稚拙な文章ではありますが寄稿させていただきます。

世間でよく言われているように、医者の子供は大きく二つに分類されるようです。すなわち、親と同じ医師を喜んで目指す者、その逆で絶対に医師にはならないと反抗する者です。その背景は様々でしょうが、私はご想像通り前者でした。ただ、それは父の仕事を理解していたからではありません。今にして思えば周到な作戦だったのかもしれませんが、両親は一度たりとも「医学部に行け」と言ったことはありませんでした。また、医学部6年生のときに「内科医になれ」と言ったこともありませんでした。にもかかわらず、内科研修が終わろうとしているときに、父は「糖尿病はおもしろいぞ」とほとんど初めて私にアドバイスしたのです。（どうやらそれが本音のようでした。）

こうして私は糖尿病専門医としての道を歩むこととなりました。初めて近藤医院で外来診療をやらせてもらった日の朝、父は少しはにかんだ表情の後で満面に笑顔を増かべていたことを、今でもはっきりと覚えています。子供の頃、初めてグローブをつけてキャッチボールをした時に見せた表情とよく似ていたかもしれません。

医師として、そして一人の父親として、大きな影響を与えてくれたことに感謝しています。



近藤医院 病院スタッフより

『何よりも「患者さんのために」を優先した先生』

医療法人糖和会 近藤医院 堀口 ハル子

近藤甲斐夫院長がもういらっしゃらない…。どうしても実感がわきません。先生は今も近藤医院にいらっしゃいます。診察室のカーテンを開ければ、いつもどおりのにこやかな顔で患者さんを迎えてくださるし、私たちの相談にも乗ってくださる。スタッフは皆、そんな思いで仕事をしています。ですから寂しくはありません。院長先生に見守られて仕事をしているのですから。

告別式の翌日、患者さんの一人に「看護師さんたちが、いつもどおり明るくて、ほっとしたわ。」と言われました。

近藤医院とは昭和病院からのご縁です。近藤医院開業の時からお世話になり、師長として30年が経ちました。長いようであつという間の年月でした。今、改めて、近藤甲斐夫院長の偉大さを感じています。

先見の明のある方でした。いつも患者さんのためになる医療を求め、インスリン自己注射の健保適用運動を積極的にされたり、コメディカル体制や訪問診療などに取り組まれていました。スタッフたちの専門性を認め、「おおいに勉強なさい。患者さんの質問に答えられるように。」とよく言われたものです。

深い知識を偉ぶることなく、穏やかでいつも冗談を言って周囲をなごませていた先生、誰に対しても、人間として向き合う先生でした。病状がかなり悪化された患者さんにも「俺が最後まで診てやるからな。」と一生懸命でした。スタッフたちは、その姿勢を常に見ていますから、同じようにどの患者さんにも接します。一番大事なことを教育してくださっていたのだと思います。

近藤甲斐夫先生、私たちは大丈夫です。院長の右腕となって医院をまとめてこられた奥様の弘子先生とともに『患者さんの立場に立った医療を』の心を忘れず励んでまいります。明るく、笑いの絶えない近藤医院でいます。大好きなお酒を飲みながら見守ってくださいますね。

長い間、ありがとうございました。

近藤先生の患者さんより

『近藤甲斐夫先生のご努力に感謝』

(近藤医院内患者会) 野火止会会長 吉岡 定江

昨年後半になり、私のHbA1cが7.0%から6.4%になり、さらに2カ月後5.9%まで下がりました。いつも6.5%以下にするよう指導頂いていましたので、今度こそ6.4と5.9の2度連続して指導値をパスしたので、2度目の院長先生笑顔(← 😊 ニコニコ顔)のハンコを健康手帳に押しつけて頂けるものと喜んでいました。5.9%に下がったその日は院長先生が医院に見られませんでしたので、残念に思いながら次回診察時には必ずと思つて帰りました。

ところが1月23日別件で近藤医院をお尋ねしたところ、今回のような訃報に接し、びっくりすると同時にハンコどころか私達患者は今後どうなることかと一瞬頭が真っ白になりました。しかし、近藤医院の医療体制を考えると副院長(現院長)はじめ師長およびスタッフの一致した協力で明るく丁寧に患者に接し医療を推進されていますので今後も何ら心配無いと悟っています。

これと言うのも院長先生長年にわたる立派な医療体制を築かれた努力だと感謝いたします。この医療体制とは、他に例を見ない立派な医療としてなによりも患者のためを思い勤務に出かける人のため早朝6時30分から診察を始めていること、また患者の誰に対しても献身的に気取りなく全スタッフが明るく元気に医療を実施されていることです。又医療内容としては、血糖値以外、糖尿病の総合的な指導、検査項目として身長、体重、血圧、半年に1度の血液検査、レントゲン、心電図、眼底検査や頸部エコー、腹部エコー、心エコー、血液流れ検査等も行っています。HbA1cについてもその日のうちに判明すること等々で患者にとっては大変安心できる事です。この体制を築いた努力に対して心から感謝申し上げる次第です。

私達患者会(野火止会)は少しでも先生の意のあるところを汲み、新院長、師長ならびにスタッフの皆さんの指導のもと、血糖コントロール向上に向かって努力しなければならないと思っています。このような医療体制を築かれた院長先生に対して心から感謝申し上げます。

どうか安らかにご永眠されますことをお祈り申し上げます。

当研究会役員より

『近藤先生ありがとうございました』

医療法人社団ユスタヴィア 理事長 宮川 高一

近藤甲斐夫先生がお亡くなりになったことをいまでも信じられません。ひょっこり西東京の研究会に出てこられる気がしてなりません。そのくらい唐突なことでした。先生がいらっしゃらなければ今の私はないと言って過言ではありません。

西東京臨床糖尿病研究会が昭和61年に発足した後、当時多摩老人医療センターに赴任したばかりの中野忠澄先生とともに誘われて、第5回の研究会に参加させて頂いたことを良く覚えています。立川にある北多摩医師会の会議室で、5~6名の参加人数で症例検討をしたことを昨日のように思い出します。もう一つは平成2年、近藤先生が東京都糖尿病協会全国糖尿病週間の実行委員長で、九段会館で「中断対策」について講演させて頂いたことです。当時私は卒業後12年目で、学会発表や論文は書いていましたが、講演での初めてのメジャーデビューでした。その講演を聴いて下さった先生方から、その後講演の機会をたくさん頂きました。この二つの出来事が、立川相互病院でこつこつと仕事をしていた私にとって、大きな視野の拡大になりました。

先生と府中市医師会の伊藤眞一先生が創始されたこの研究会が、いまではNPO法人となり、日本の糖尿病地域医療・連携を語る時無くてはならない存在になったことは、やはり先生が「お互い顔の見える関係」を重視した「病診連携」のための研究会をつくられたその先駆性にあると今でも感心しています。

今、私の同僚藤井仁美先生が近藤医院で仕事をさせて頂いています。また聞きですが、先生の所の教育システムを参考に当法人のシステムを作らせて頂いています。ずっと先生の背中を追いかけてきました。先生の遺志をつぎ、当研究会のみでなく糖尿病協会の仕事も含め糖尿病地域医療に邁進したいと思います。



当研究会役員より

『僕の横にもいつも「近藤先生」がいる。』

伊藤内科小児科クリニック 伊藤 眞一

小生の開業医の糖尿病診療が初まったのは昭和55年(1980年)です。大学で糖尿病を専門にしていたのですが、大学で貯えた糖尿病に関する知識が底をつき、そろそろ自己研修をせねばと、とある研究会に参加した折、近藤先生にお逢いしたのが初まりです。

西東京の旗揚げにしても先生のお誘いで参加できたし、(初代表世話人近藤先生、2代目が小生)、東京保険医協会から1996年に出版した「糖尿病の保険診療—開業医のためのQ&A」も二人の共著でした。(この本は現在まで第7版を世に出すことができました。)糖尿病セミナーの講師を初めてさせていただいた時も近藤先生と一緒にしました。

近藤先生と小生は糖尿病専門医として、いつも共に羽ばたき、共に頑張り、共に勉強してきました。近藤先生はちょうど小生の10歳年上、小生の兄貴でした。いつの頃からか忘れましたが、病をもたれ、時々病院に通院していることは知っておりましたが、そんなことをみじんも感じさせず、いつも明るくいつも穏やかに、接してくださいました。

昨年夏、とある世話人会で、いつものように接して下さり、いつものように明るく振る舞われた最後に、お得意のハーモニカで、哀愁こめた日本のメロディーを奏でてくれた近藤先生、その時小生は近藤先生と別れる日が近いことを感じ涙がとまりませんでした。悲しかった。

しかし、近藤先生も出筆して下さった「患者さんの質問に答える外来糖尿病診療」を、昨年12月1日に第3版として世に送り出すことができ、本当によろこんでいただけたのがせめてもの救いです。合掌

当研究会会員より

『もう聞くことができない「また逢えたね」と先生との秘密』

立川相互ふれあいクリニック 小池 日登美

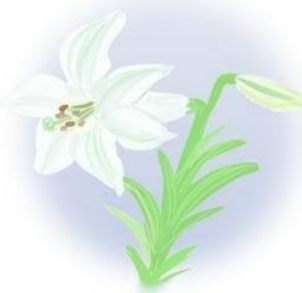
1月23日の雪の降り出した寒い日に、近藤甲斐夫先生の訃報に接しました。

私が初めて先生にお目にかかったのは、西東京で行われた勉強会です。いつの頃からか、お会いする度に「また逢えたね。頑張っているね。」というお言葉に元気をいただきました。もう先生の「また逢えたね。」を聞くことができなくなりました。

暖かくなったら大好きなかりんとうを持って遊びに伺い、糖尿病研修会で行ったフィンランドでの思い出話をする約束をしていました。

先生とは、奥様である弘子先生公認の秘密があります。それは、森の中のコテージに滞在した時のことです。1日中、食事を作り、お酒を飲み、たくさんのお話を語り合いました。みんながほろ酔い気分でお昼寝モードに入っていたので、私はガイドの女性とフィンランド式サウナの入り方である裸で湖に飛び込んでいました。誰も見ていないと思っていたのに、なんと近藤先生が窓からそっと覗かれていました。その後「小池ちゃんの〇〇見ちゃった。」「これは西東京の誰も知らないふたりだけの秘密だよ。」と楽しそうに言われました。こんなおちゃめで素敵な先生と秘密を持てたことは私の宝物です。

そして、先生に教えていただいた患者さんを大切にすることをいつまでも忘れずにいきたいと思います。ありがとうございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



《発行元》

NPO法人 西東京臨床糖尿病研究会 事務局
〒185-0012
国分寺市本町2-23-5 ラフィネ山山No.3-802
TEL: 042(322)7468 FAX: 042(322)7478
http://www.nishitokyo-dm.net
Email:w_tokyo_dm_net@crest.ocn.ne.jp

《編集後記》



mano a manoの100号の原稿をご依頼してからまだ日が浅い中、近藤甲斐夫先生の訃報を耳にしました。この会を創設された先生のいつもにこやかに、患者さんの目線で診療をしていく姿は、私たち西東京臨床糖尿病研究会会員の理想でした。先生にはまだまだ教えて頂きたいことや、一緒に酒を飲みながら話をしたことがたくさんありました。今やそれはかなわぬ夢になりましたが、先生の想いはこの会の会員一人一人の胸の中に着実に芽吹き育ち始めています。長い間御苦勞様でした、そしてありがとうございました。合掌 (広報委員 植木 彬夫)